

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520180

研究課題名（和文） モダニズム芸術における米ソ文化交流の軌跡と黒人知識人の中心性

研究課題名（英文） The Centrality of African American Intellectuals to the U. S. -Soviet Cultural Exchange in the Era of Artistic Modernism

研究代表者

新田 啓子 (NITTA KEIKO)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：40323737

研究分野：ヨーロッパ語系文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ合衆国、ソヴィエト連邦、モダニズム、黒人、文学批評、越境文化

1. 研究計画の概要

本研究では、1920～30年代に活動を始めたアメリカ合衆国（以下米国）モダニズム芸術家に、当時のソヴィエト連邦指導者層およびロシア文化との影響関係にあった人々が有意に存在したという事実、並びに彼らのうちで中心的な役割を果たしたのが黒人知識人であったという事実を光をあて、以下の四点について、その意義を詳らかにする。(1) 同時期にソ連を訪れた黒人知識人は、ロシア文化の何に学ぼうとしていたのか。(2) ハーレムとモスクワの文化コネクションは、同時代における米国知識人の自文化イメージに、どのように影響していたのか。(3) 米ソ文化交流は、ソ連および米国の共産党とはいかなる関係にあったのか。その断絶は認められるのか。(4) それらの交流は、東西冷戦下にあった60年代の黒人知識人にどのように引き継がれ、いかなる展開を遂げたのか。

以上の四テーマに分けた事情を記述することにより、多くの場合、政治的競合関係に隠蔽された米ソの文化芸術分野における関係を詳らかにすることが、本研究の目的である。

2. 研究の進捗状況

この3年間、1920～30年代の第一世代、1950年代以降の第二、第三世代の黒人主要知識人に関して、予定通り実質的な対ソ行動の史料調査を進めてきた。2006～2007年度には Paul Robeson, Langston Hughes, W. E. B. DuBois ならびにハーレムルネサンスの白人批評家 Carl Van Vechten の、2008年度には、Billy

Holiday, Richard Wright および Malcolm Cowley, Edmund Wilson 等モダニズム批評家の黒人文化論の著作をくまなく検討し、芸術思想の中で黒人という主体がいかなる意味を得るにいたったのかについて、考察を進めた。

史料研究については、当初計画した人物を中心に進めてきたが、とりわけ米国国立公文書館で公開されている史料にアクセスできたため、支障なく遂行されている。加えて、この米ソ交流に関する研究から、別の国際関係の裾野が現れてきたため、そちらの資料にも目を配ることになった。つまり本研究は、近代文化における「黒人」認識というテーマに広くかかわっていくものであることが遂行の過程で明らかとなり、かつその方向性での成果が、当該分野の現在の水準へ貢献をし得ることが明らかとなった。本研究では、とりわけ 1930 年代より黒人文化の輸入／翻訳を推進した日本のモダニズム文化のありようが、新たに研究の射程に入ってきた。アメリカ黒人文学は、いわばソ連経由で日本にも影響を与えていたのである。

本研究では毎年、米国へ出張した折に、当該分野で定評のある研究者と意見交換を行い、それを外部評価としているが、米国では特に、米ソの先に現れた「日本」という場への関心が高い。その関連性は、左翼芸術運動および新興芸術派運動という全く別のモダニズム運動によって築かれたものであるが、2008年度には、この点を踏まえた部分成果公開も行ってきた。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。
(理由) 黒人のモダニズム、ハーレムルネサンスの研究は、米国でも政治的な理由からあまり進んでおらず、すでに既知のテキストや史料の解釈にも、まだ不十分な点が多い。本研究は、モダニズムの特徴である政治的意識、芸術的卓越性の探究、文化的越境が黒人文化の中に反映されていることに着目し、さらにそれが米ソ文化交流の特徴の一端を成していることを明らかにするものであるが、これまでの成果により、その構想自体の可能性が高く評価された。とりわけ米国では、大西洋境とした黒人文化の越境への関心が高まっているが、さらに本研究では、それが太平洋側とも繋がっていたことを解明できるものであり、モダニズム文化の国際性の実像をさらに深めて提示する可能性を持つ。この点に関しては、2008年度に始めた英米文学専門誌『英語青年』における論文連載で、資料解説というかたちで明らかにしてきた。そうしたモダニズム期美学の解説・注釈作業は、関連書物の整理をより一層進展させた。

4. 今後の研究の推進方策

黒人の「人種」意識と左翼芸術運動、モダニズム運動が別々のルートで斬り結んだ文化状況を解明し、その意義への考察を深める。部分的な出版・公表を積極的に行い、とりわけ米国で関心の高い問題については早めに論文をまとめ、さらに著書での成果発表の機会を見いだしたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

- ① 新田啓子「アメリカ解説--資料探訪 Zora Neale Hurston, selections from *Negro* (1934)」『英語青年』第154巻第8号、pp. 26-29. 2008年10月、査読なし。
- ② 新田啓子「アメリカ解説--資料探訪 Jean Toomer, *Cane* (1923)」『英語青年』第154巻第7号、pp. 20-23. 2008年9月、査読なし。
- ③ 新田啓子「アメリカ解説--資料探訪 Malcolm Cowley, *Exile's Return* (1934)」『英語青年』第154巻第4号、pp. 38-41. 2008年6月、査読なし。
- ④ 新田啓子「アメリカ解説--資料探訪 Selected writings of Carl Van Vechten, 1916-1926」『英語青年』第154巻第3号、pp. 36-39. 2008年5月、査読なし。

〔学会発表〕(計3件)

- ① 新田啓子「黒いモダニズムと政治からの出口」、第47回日本アメリカ文学学会全国大会、2008年10月12日、西南学院大学。

〔図書〕(計1件)

- ① [訳書] トリーシャ・ローズ著、新田啓子訳。みすず書房、『ブラック・ノイズ』2009年、361+xxi pp.